CASE 5

福祉主体型

障害者(身体・知的等3障害)の雇用による大規模複合経営の確立

NPO法人美作自立支援センター(美作市楢原下)

https://npo-mimasaka.bsj.jp

視察受入れ　可

取組みの経過と事業所の概要

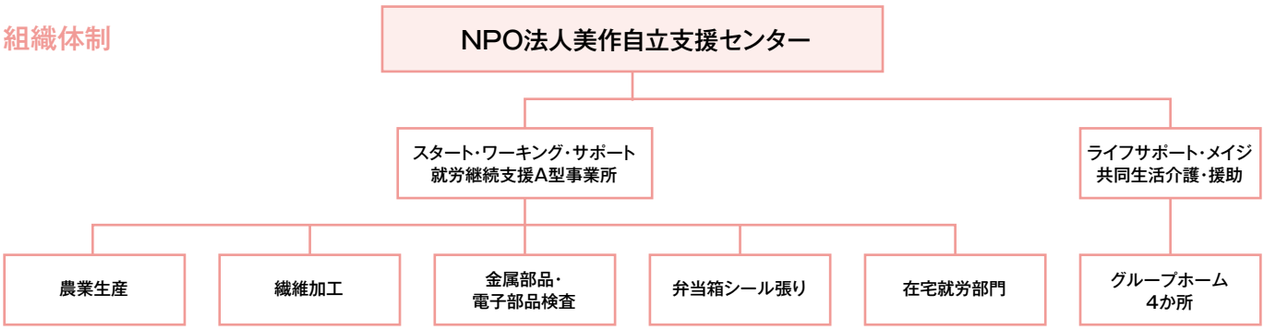
①1983年に障害者の自立と雇用促進のために、障害者2名の雇用による繊維加工を開始した。その後、障害者雇用を拡大し、1985年有限会社ヤクシを設立した。

②2009年にNPO法人美作自立支援センターを設立し、繊維加工に加えて自動車部品検査業務を受託し、就労継続支援A型事業所の業務を開始した。

③2013年に既存の部門に加えて、新たにトマトの施設栽培を中心とした農業部門を開始した。その後、稲作や地元特産品である黒大豆、露地野菜の作付けやアスパラガスの施設栽培を開始し、施設外就労として近隣農家の作業も受託している。

トマトの養液ポット栽培

組織体制



注)ヒアリング調査等により作成

経営の概要と特徴

①農業は施設栽培によるトマト(1,200㎡)　アスパラガス(1,200㎡)、稲作80a、黒大豆40a、露地野菜としてホウレンソウ1ha、キュウリ10aなどであり、四季に応じて栽培している。

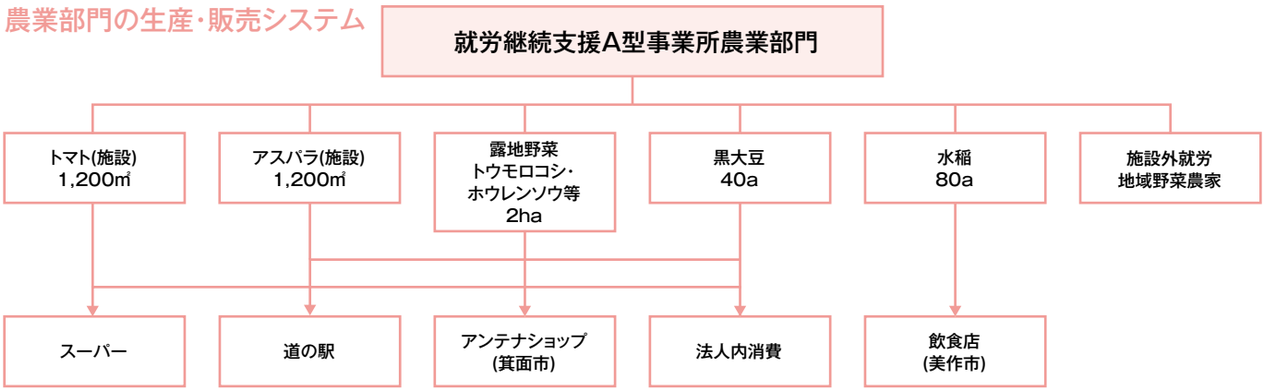
②利用者の能力向上や地域との交流促進の一環として、2018年から近隣の大規模農家からの作業（施設外就労）も受託している。

③危険を伴う機械作業等(水田の耕耘、田植、刈取)は主に指導員が行うが、希望があれば利用者も担当し、作業への適正拡大を図っている。

④農産物の主な販売先は、地元の道の駅、大阪府箕面市にある美作市アンテナショップ、農協、主として地元スーパー、飲食店、法人内での直接販売などである。

ホウレンソウの管理作業

農業部門の生産・販売システム



注）ヒアリング調査等により作成

農福連携の効果とポイント

①トマトは軽いポット土を使用した低段密植栽培を導入しており、溶液潅水の自動化など利用者の負担軽減を考慮するとともに、短周期での栽培サイクルにより冬期などでも安定した雇用の確保を実現している。

②施設栽培では作付面積を減らし、通路を通常のハウスより広くとることにより、下肢に不安のある利用者でも安心して作業ができるように配慮し、「スニーカーでもできる農業」を目指している。

③指導員は「利用者目線」に立ち、利用者の「相互協力」をもとに、共同作業による利用者の連帯感を高めている。また、農業という特質上、「365日同じ作業」を行うことが難しいなかで、春夏秋冬、それぞれの季節に応じた野菜を作付けることで、熟練した利用者が経験の浅い利用者に助言や支援が出来る体制を整えている。

④利用者にも栽培計画に参加してもらい、「自身が育て、売るのだ」という認識と成功した時の達成感などを高め、作業意欲の向上に努めている。

トマトの管理作業

きゅうりの管理作業

CASE 6

農業主体型

農業労働力確保による規模拡大と障害者の適性に応じた業務分担の実現

株式会社おおもり農園（岡山市中区兼基）

https://omorifarm.jp/

視察受入れ　可

取組みの契機と経過

①2002年より市街化区域内において、夫婦2人でイチゴ栽培を開始した。その後、2008年に葉物野菜（水耕栽培）も始め、2014年に法人化して、おおもり農園株式会社を設立した。

②中四国農政局主催のシンポジウム（「クローズアップ農の福祉力」）に参加し、障害者の就労支援に関心を持った。これを機に農福連携の取組に着手、2009年に就労継続支援B型事業所から施設外就労で障害者を受け入れ、水耕野菜の軽作業に人手を確保した。

③その後、同施設外就労の受入れは終了したが、2010年にNPO法人杜の家を設立し、翌年、就労継続支援A型事業所「杜の家ファーム」を開設した。現在、おおもり農園が杜の家に作業委託し、障害者がイチゴ生産等の工程の一部を担っている。人手を確保するとともに、高齢化で離農する地域農家の農地を引き継ぎ、経営面積も徐々に拡大させてきた。2017年に就労継続支援B型事業所「晴れの国」を他の運営組織から継承し、併設している。

④その他に、2015年に放課後等デイサービス事業「りゅうそう放課後ラボ」を開所し、障害のある子どもへの支援も行っている。

葉かき作業

自動音声秤を利用した規格分け作業

経営の概要及び取組みの内容

①イチゴの生産面積は35aで、主な販路（生食用）は、市場出荷、直売、業務用である。6次産業化の取組として、冷凍イチゴやイチゴピューレ、イチゴシロップも開発し、業務用に販売している。

②農業労働力は、おおもり農園で常勤3名、非常勤1名である。作業委託している杜の家ファームからの人員は、利用者が20名（身体障害1名、知的障害2名、精神障害15名、その他2名）、職員が3名である。

③イチゴは、親株管理等が省力化できる無育苗栽培により栽培にかかる作業を簡素化し、障害者が栽培段階から複数の作業に従事できる機会を創出している。

④収穫後の出荷作業では工程を細分化し、作業工程は曖昧な作業と単純な作業に分け、障害者の適性に応じた業務分担を行っている。

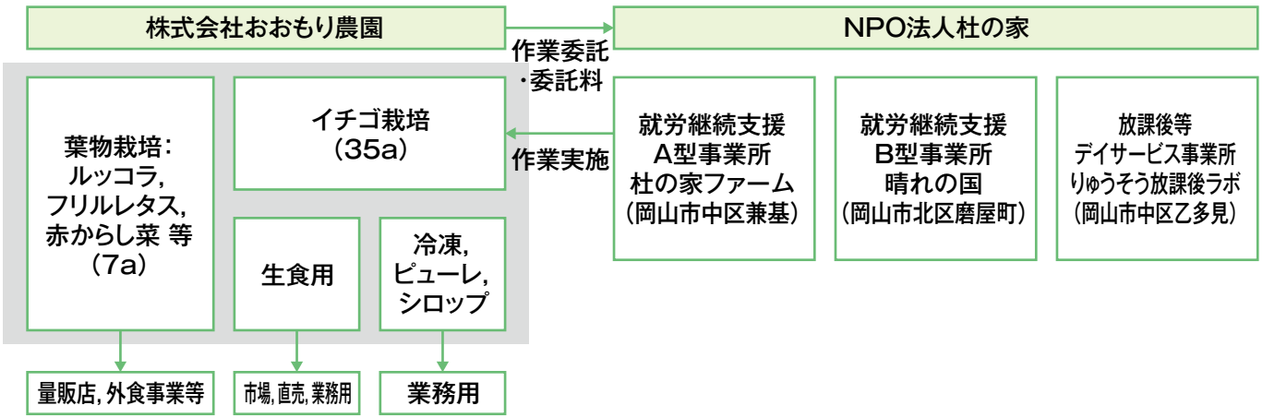
⑤勤務時間は1日平均5.5時間であるが、利用者の状況に応じて設定し、障害特性に配慮した勤務シフトもとっている。

利用者の作業内容

利用者が担当する作業（イチゴ生産）	
管理作業	親株除去
	台刈り
	ランナー整理・葉かき
	子株植付
	親株除去・葉かき
	かん水（自動）
	収穫
出荷作業	選果
	パック詰め
	セロハン張り
	箱詰め
	結束荷造り
	圃場・選果場掃除
	その他

注）ヒアリング調査等により作成

おおもり農園と杜の家ファームの概要



注）1　ヒアリング調査等により作成
　　2　2020年10月までの経営概況。同年11月以降はイチゴ生産に特化。

農福連携の効果とポイント

①作業工程ごとに見本の写真を載せた作業手順書（ファイル）や掲示物を複数作成している。これにより障害者が視覚で容易に作業内容を把握でき、自立的に作業できるよう、工夫している。

②選果の工程では、音声選果器を導入し、障害者がサイズを判断する際の精神的な負担（不安）を軽減させている。これにより、判断ミスが減少し、作業できる人員が増えたといった効果もみられている。

③杜の家ファーム利用者の「一般就労」への移行を、取組ビジョンの一つとして明確に位置付けることにより、障害者の適性に応じた業務分担や勤務管理を着実に実現させており、おおもり農園の安定的な労働力確保にも繋げている。

マニュアル（パック詰め）

CASE 7

農業主体型

利用者のスキルアップにより安定生産と市場出荷を実現

就労継続支援A型事業所マヤファーム（和気郡和気町本）

http://maya-farm.com/about

視察受入れ　可

取組みの契機と経過

①2006年に、理事長が会社勤務から農業に転職し、地元の野菜栽培農家の「マヤファーム」を継承した。その後、地域の障害者施設（就労継続支援B型事業所）の利用者が農作業に来園するようになり、その働きぶりを見て、“自立を後押ししたい”と思うようになり、2011年に職親事業で障害者2名を受入れた。2011年に特定非営利活動法人ネオクリエイションを設立し、障害者就労支援事業として展開させるため、2012年に就労継続支援A型事業所「マヤファーム」を開設した。

②開設当初、農地面積は0.5haであったが、地域の高齢農家や非農家から農地を借りてほしいとの要望が増え、農地面積は徐々に拡大し、現在、6.5haにまで広がっている。

白ネギの調整

白ネギの収穫

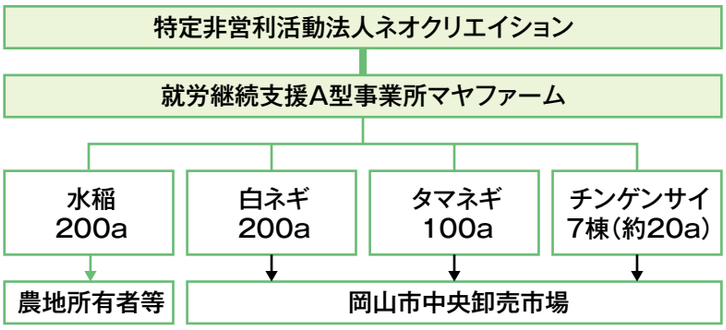
経営の概要及び取組みの内容

①利用者は、2020年で21名である（身体障害2名、知的障害12名、精神障害7名）。開設当初4名であったが、継続就労や新規登録により人数が増加した。

②生産物は、米、白ネギ、タマネギ、チンゲンサイである。米は借地料とし、野菜は岡山市中央卸売市場へ出荷し、高値で競り落とされている。生産物は一部、青空市で販売したり、地域の福祉施設や、知人が経営する飲食店等に提供したりする場合もある。

③経営の主力は、チンゲンサイ（ハウス7棟）で、1ハウスあたり8～9作を実現し、周年栽培している。利用者が行う作業には、種まき（トレー）、育苗（水やり）、施肥計量、圃場の準備、耕うん、畝たて、マルチ、苗の定植、かん水（電気ポンプ）、追肥（液肥）、農薬散布、除草（ハウス内）、収穫、パッキング（調整，計量，選別，袋詰め）、箱作り、荷積み、資材運搬があり、トラクターおよび機械類、作業車両を利用する場合もある。

マヤファームの生産・販売システム



注）ヒアリング調査等により作成

利用者の作業内容

利用者が担当する作業（チンゲンサイの生産）
種まき（トレー）
育苗（水やり）
施肥計量
圃場の準備
耕うん
畝たて、マルチ
苗の定植
かん水（電気ポンプ）
追肥（液肥）
農薬散布
除草（ハウス内）
収穫
パッキング（調整，計量，選別，袋詰め）
資材運搬

注）ヒアリング調査等により作成

農福連携の効果とポイント

①ハウスのチンゲンサイを基幹とし、複数の作目を組合せて年間を通した作業を確保することにより、障害者の最低賃金を確保している（月額平均7万5千円～9万円）。

②勉強会等の開催や農業技術指導の向上により、利用者のスキルアップを図っている。個別対応を重視しつつ、得意な作業の能力向上だけでなく、苦手な作業もできるよう、全ての利用者に一連の工程を経験する機会を設けている。

③栽培作業のみならず、利用者が作業計画の作成等にも携わる機会を設けており、複数の利用者が、栽培行程と作業内容の詳細を理解し、習得した知識や技術を実践の場で活かすことができている。

④障害者のスキルアップを図るための指導が営農努力の成果として現れており、地域住民からの信頼も高まり、借用農地は事業開始当初と比較して10倍以上に拡大している。現在、和気町周辺地域を含め、70箇所以上の農地を借り受けている。

⑤その他に、季節のイベント等を行い、農作業以外の場面を通して利用者間、職員と利用者間のコミュニケーションを図っている。

チンゲンサイの収穫

チンゲンサイの袋詰め

CASE 8

農業主体型

事業所直営の花苗生産と施設外就労による野菜栽培、学校給食が大口顧客（西日本豪雨災害を乗り越えて）

就労支援作業所A型「みんな農園」（倉敷市真備町川辺）
https://jungle-land.wixsite.com/minnanouen

視察受入れ　可

取組みの契機と経過

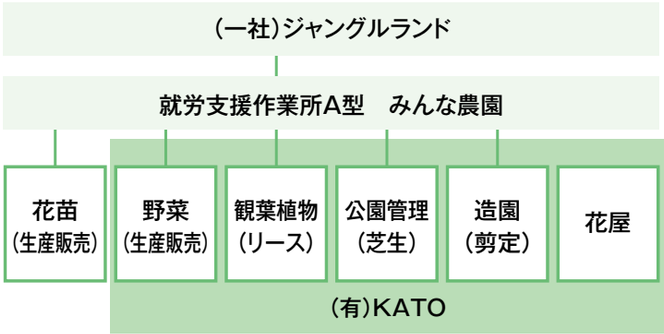
①代表者の父親が1980年に（有）加藤植物園を設立し、観葉植物・花屋・造園の事業に取り組んでいた。

②花のバイヤーであった代表者は、花苗生産に取り組んでいた「せのお農園」（吉備中央町）から農福連携のノウハウの情報を得た。2013年に農業を通じて地域の障害者の福祉に貢献する一般社団法人ジャングルランドを設立し、2014年にA型事業所「みんな農園」を開設した。なお、利用者の賃金確保のため、花苗生産部門は「みんな農園」の直営としている。

③（有）加藤植物園は、2015年に（有）KATOに継承され、加藤家の農業経営も併せて行っている。なお、（有）KATOでの農作業は、みんな農園からの施設外就労となっている。

花苗のスペーシング

組織体制



注）ヒアリング調査等により作成

経営の概要及び取組みの内容

①利用者は、身体・知的・精神（発達障害を含む）障害者の19名である（定員20名）。

②農作業は、代表者等が農薬散布や機械作業を行い、それ以外の作業を利用者が実施している。

③販売ルートは、花苗が倉敷市や総社市内の農産物直売所である。野菜は倉敷市の紹介により、学校給食会を通じた販売が概ね半分を占めており、残りは農産物直場所とスーパー直売コーナーである。

④就労業務量は野菜生産（施設外就労）が最も多く、次いで花苗生産（施設内就労）、その他の施設外就労となっている。

⑤2018年に大水害を受けたが、農業関連の施設や農機具の一部は国等の補助金で再取得することができた。

⑥福祉関連財団助成事業により食品乾燥機を導入し、現在「味噌汁具材セット」の試作をしている。

経営の概要

作　目	面積（a）	備　考
花苗ハウス	34	春期： ストック、ベゴニアなど　49品目 秋冬期： パンジー、葉ボタンなど　14品目
野菜類	365	春夏期： きゅうり、なすなど　26品目 秋冬期： キャベツ、白菜など　29品目

障害者が担う主な作業と工夫点

作　目	分　担	主な業務内容	作業上の工夫点等
花　苗	代　表　者	セル苗の購入、農薬散布	収穫作業において、適期収穫を徹底するため、現物利用による指導
	利　用　者	ポット土入れ、鉢上げ、かん水、スペーシング、出荷前の調整	
	指　導　員	直売所への搬入	
野　菜	代表者の父親	トラクターによる耕耘等の作業	
	利　用　者	堆肥散布、施肥、播種、除草、防除、収穫、調整	
	指　導　員	学校給食、直売コーナーへの搬入	

注）ヒアリング調査等により作成

農福連携の効果とポイント

①農福連携に取り組むことにより、学校給食への食材提供が倉敷市内全域に拡大し、主要な販路になっている。

②農業生産には様々な作業があるので、利用者の能力・状況に応じた作業を任せている。

③収穫適期の判断にはブレ（収穫物が多いと取り残し、少ないと適期前に収穫する）が生じやすいので、作業前に毎回、収穫物（現物）を示して作業を開始するなど、きめ細かく指示している。

④水害からの復興がほぼ完了したので、今後は賃金向上対策として、施設内に花苗や野菜の直売所を設けて販路拡大を図る。また、学校給食への供給計画に基づいた野菜作付体系を作り、学校給食への供給比率を高める。

学校給食用野菜の出荷準備

露地野菜の栽培ほ場

CASE 9

農業主体型

ファーム（健常者）とアグリ（障害者）の役割分担による大規模観光農園の実現

（有）吉備高原ファーム（吉備中央町田土）

http://plus.harenet.ne.jp/~kibifarm/

視察受入れ　可

取組みの契機と経過

①父親が経営していた籾殻燻炭会社の社員が周年的に働く場所の確保と農家の高齢化に伴う耕作放棄地の活用を図るため、2006年3月に農業生産法人㈲吉備高原ファームを設立した。そして、燻炭製造との労働分散が図りやすいスイートコーンと園地荒廃の危機があった地域特産品のぶどうとで新規に農業を開始した。

②急速に進む過疎・高齢化の中山間地域にある法人では、代表者が顔なじみの地元出身者であったため、地域での信頼も厚く農地の集積が加速度的に進み、ある程度の規模になった。

③そこで、障害者の人達に農業の技術を身につけてもらい就労支援ができる場が整ったと考え、2014年5月に一般社団法人アグリネット加賀を設立し、翌年1月に「アグリネット加賀」で活動を開始した。そして、農福連携によりファーム（健常者）とアグリ（障害者）の役割分担による大規模観光農園を実現している。

経営の概要及び取組みの内容

①吉備高原ファームはぶどうを直売・観光農園にしているため、ニーズの多様化に応じた多数の品種（50品種目標）を導入している。また、周年的な就労機会と安定的な収益を確保するために、春夏にはスイートコーンの多品種（13品種）・連続栽培を行い、秋冬にはホウレンソウ、ブロッコリー、カリフラワー、ハクサイ等を導入している。さらに、収益性の高い黒大豆も大規模に作付けしている。

②農業労働力は、吉備高原ファームでは常勤4名、パート1名（元従業員で新規就農後もパートとして応援）であり、アグ

ホウレンソウのかん水作業

リネット加賀では、職員4名(内農業指導2名)、利用者11名（知的障害）である。

③作業分担では農業機械を利用した作業や早朝の作業をファーム職員が行い、アグリネットが手作業や人手を多く必要とする作業を請け負っている。

④販売ルートはスイートコーンとぶどうが直売中心であり、その他の野菜、黒大豆は岡山市・倉敷市等の卸売市場やJAである。

⑤直売の比率を高めるために、DM（農園だより）、体験農園（収穫体験）、ぶどうの品種増加（50品種が目標）に取組んでいる。

組織体制

（一社）アグリネット加賀　A型事業所

作業委託　作業実施　賃金支払い

（有）吉備高原ファーム

農地面積	18ha		
作　目	面積（a）	作　目	面積（a）
ぶどう	300	野菜類	200
スイートコーン	600	黒大豆	200

作目別の農作業分担表

作　目	吉備高原ファーム	アグリネット加賀
ぶどう	剪定	剪定枝拾い
	ビニール張り	ビニールのクリップ止め
	誘引、摘心、房ぞろえ ジベ処理、摘粒、袋かけ	副梢切り、草刈り
	収穫	袋の針金外し、粒切り、箱折り
スイートコーン	マルチ張り	ポット土詰め、播種、定植、かん水
	収穫	雄穂切り、収穫後の軸切り、実の清掃、箱折り
ホウレンソウ	播種	播種後の不織布張り及び除去、水やり
	ー	収穫、調整、洗浄、袋詰め

注）ヒアリング調査等により作成

農福連携の効果とポイント

①障害者を含む多くの人々が地域内で働ける場所を確保するとともに、地域内の果樹園や水田の管理を積極的に引き受けることにより、耕作放棄地の発生を未然に防ぐ役割を果たしている。

②月間22日の勤務日数を確保するために、土曜日も就業可能としている。このため、通院により平日勤務ができない人は、月2日程度の土曜日勤務ができる。

③農福連携によるアグリネット加賀に作業委託することで、吉備高原ファームの大規模経営を確立している。

④福祉事業所間のネットワーク「レインボーカフェプロジェクト」に参加して、スイートコーンの加工（お茶、混ぜごはん）やぶどうドライフルーツの試作に取り組んでおり、事業所間連携によりお互いの仕事（製品の袋詰めの作業委託等）を増やすことに貢献したい。

ホウレンソウの調整作業

個数を確認した後、箱詰め作業

CASE 10

連携型

福祉事業所との協働作業で ニンニクの大規模生産が可能に

丹原農産（笠岡市拓海町（笠岡湾干拓地内））

視察受入れ　可

取組みの契機と経過

①1990年頃、父親が笠岡市の笠岡干拓地に入植し、義和氏は2003年に就農して、5haの農地で露地ナス、黒大豆、白小豆、二条大麦の栽培を開始した。

②農繁期にはシルバー人材センターに農作業を依頼していたが、農作業を引き受ける人材不足が進んだ。このため、2010年頃に「ど根性ファーム」の農福連携の取組を知り、そこから福山市の福祉事業所を紹介してもらった。その結果、農作業の委託先をシルバー人材センターから福祉事業所に変更した。

③ニンニク栽培は、（株）岡山アグリフーズ（笠岡市）と契約しており、2013年に50aから開始した。当初は夫婦2名での栽培で植付作業や収穫作業には多くの労力を要していたが、福祉事業所へ作業を委託したことで、現在では300aまで栽培面積を拡大することができた。

ニンニクの栽培ほ場

ニンニクの播種（利用者）とトラクター作業（経営主）

経営の概要及び取組みの内容

①広大な干拓地を利用した二条大麦、白小豆、ニンニク等の大規模経営である。

②農業労働力は経営主夫婦と地元の女性パートの数名であるが、ほぼ年間を通じて福祉事業所に手作業を委託している。大型機械と手作業によるきめ細かい栽培管理を組み合わせることにより、ニンニクだけでなく、白小豆や黒大豆の品質・収量の向上を図っている。

③販売は、JAに出荷する二条大麦以外は、加工メーカー、卸・小売り業者との契約栽培である。

組織体制

遠行工房（福山市）

いろどり（倉敷市）

S（福山市）、H（矢掛町）、Y（里庄町）、A（笠岡市）

作業委託　作業実施　賃金支払い

丹原農産

農地面積	8ha		
作　目	面積（a）	作　目	面積（a）
ニンニク	300	二条大麦	500
白小豆	500	ゴマ	100
黒大豆	200		

障害者が担う主な作業と工夫点（ニンニクの場合）

分　担	主な業務内容	作業上の工夫点等
丹原農産経営主	大型トラクターによる耕起・整地・畝立て・溝切り作業 直売所への搬入	調整作業のうち、キズや腐敗があるものを取り除く作業は、障害者には不向きな作業である(判断基準が判然としない)ため、健常者のパートが実施
主要な委託先 遠行工房（福山市）、いろどり（倉敷市） その他委託先 (福山市、笠岡市、矢掛町、里庄町の4カ所)	種子割・定植・除草・収穫・調整	

注）ヒアリング調査等により作成

農福連携の効果とポイント

①家族労力ではニンニク栽培面積50aが限界であったが、福祉事業所へ作業委託することにより、300aまで規模を拡大することができた。

②ニンニク栽培では、丁寧な「手作業」が品質や収量の向上に欠かせない。各農作業の契約単価を健常者の作業量の2/3程度に想定しており、利用者にとっても工賃アップにつながった。

③長年の取組により、仕事の段取りなど指導員とのコミュニケーションもスムースに行うことができるようになった。このため、現場での農作業を事業所に任せて、必要な業務（大型機械の利用、経営管理業務）に専念できるメリットが大きい。

④福祉事業所に農作業を依頼した初期の印象は、「思った以上の丁寧な仕事ぶり」「健常者2名の仕事を3名でこなすことができる」と、期待を上回るものであった。今では、福祉事業所は仕事上のパートナーだと考えている。

ニンニクの種子割作業

ゴマの選別作業

農福連携に関するお問い合わせ

岡山県農福連携サポートセンター

〒700-0807 岡山市北区南方2-13-1　きらめきプラザ1階
TEL：086-222-0300

岡山県障害福祉課

〒700-8512 岡山県岡山市北区内山下2丁目4−6
TEL：086-226-7345

岡山県農産課

〒700-8512 岡山県岡山市北区内山下2丁目4−6
TEL：086-226-7420

中国四国農政局農村振興部農村計画課

〒700-8532 岡山市北区下石井1丁目4番1号
TEL：086-224-4511